

平和へのおもい

広瀬 隆夫

毎年、蝉しぐれを耳にすると物資も欠乏し、敗色濃厚になった第二次世界大戦末期の少年時代を思い出さずにはいられない。終戦の年、昭和二十年、当時私は、山梨県に住んでおり、国民学校（現在の小学校）の四年生で、軍国主義の教育を徹底的に仕込まれていた。「打ちてしまえ」「鬼畜米兵」「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません勝つまでは」等々のスローガンをいまだに覚えている。御多分にもれず将来は軍人になることを夢みていたが、子供心に何となく日本の戦況が不利になってきつつあることを感じていた。なぜなら、毎日、毎日、アメリカの大型爆撃機「空の要塞（さい）」といわれたB二十九の編隊が、真っ白い飛行機雲を何本も流しながら、富士山上空を通過し、東京、神奈川方面にゆうゆうと飛んで行くのを皆で指を加え

えて眺めていた訳であったからである。加えて主食といたら「すいとん」か、大根、馬鈴薯を細く切って米に混ぜたり、大豆、甘薯（かんしょ）のツルを干したものでも口に入れば良いほうであった。また、夜は電灯の光が外に漏れないように黒い布で覆い、白壁は、すべて泥や油煙を塗って敵機から少しでも見えないようにと工夫も凝らした。今から思えば、おかしい話であった。勉強どころでなく、空襲警報と同時に逃げだし、防空壕に避難する訓練ばかりしていた。このような状況の中で、特に忘れられない思い出がある。それは、今でも私の家の近所に小学校があるのだが、講堂には軍隊が駐屯し、運動場では日夜演習に励んでいた。子供心に興味が沸いて休憩の時、皆で遊びに行ったものだった。見知らぬ兵隊さんと仲良くなりかわいがってもらった。しかし、軍隊とて食糧の不足していた当時、過酷な演習、演習で既定の食事で足りる訳はなく、時々、こっそり家に食物を貰い

にくるようになった。軍規違反と知りつつも、一時の空腹を満たすためか、解放されたい気持ちであったか定かではなかったが、便所に隠れて母の作った代用食を、おいしそうに食べ「お礼」と言ってお礼筆等置いて帰っていた。

私の父も四十歳で召集令状が来て遺書を残して出征して行った。死を覚悟していたのだろう。真夜中、複雑な気持ちで駅まで見送りにいった星見夜も忘れなかった。そんなこともあって母は兵隊さんの面倒をよく見たのかも知れなかった。

しばらくして部隊は引き揚げ、演習場として使われた運動場は、甘薯畑となり、私たちの食糧の一部となった。あの時の兵隊さんどうしただろうか、元気で無事復員できたか、それとも外地に派遣され戦死しただろうか。今年も暑い夏が来て蝉の声を聞くとあの厳しかった子供のころが懐かしく思い出される。

青い空の色は変わらない。五十年前の空の

色と通じているが、この平和の空はだれのお陰なのだ。むなしく散っていった幾多の人々の尊い生命を無駄にすることなく、世界人類の平和的共存のために努力することが、残された者の使命であると思う。